「巻き貝とダンスバトルの熱い一日」

沖縄テレビ放送㈱アナウンサー● 伊藤彰伸

イベントが開催される朝、まだ3月だというのに、空は夏色だった。

蝉の鳴き声こそ聞こえないがジージーと騒がしい空気。そのうえ冬の澄んだ感触とは違う、モワッとした湿り気を感じた。旅行社の看板は、一足早い夏のイメージを打ち出し、各地でイベントが目白押しだった。本土（九州より北のこと）からやってきた多くのイベント関係者・出演者が那覇空港に押しかけ、沖縄のあちらこちらで開催されるイベント会場に直行していた。

私はアナウンサー。30代も半ばを過ぎて仕事も家庭も順風満帆・絶頂期のときにちょっとしたことから、全てが崩れ、グシャッとつぶれそうになった。私は貝になりたい！本気でそう思った。できれば巻き貝で。あの巻き巻きの、一番奥の方に小さく縮こまって「命だけはお助けを～」と。そんな私だから、久々に人前に出るイベント司会の仕事に、少々腰が引けていた。私はタクシーに乗り込んで、那覇の職場から40分ほどの本島南部地域にあるビーチに向かった。

その名も「あざまサンサンビーチ」。暑いっ、やけどしそうな名前のそのビーチは早くも海開きで、トライアスロン大会が行われていた。今、夏のシーズンが幕を開ける・・その会場で、これまた関係者の熱い思いを乗せたダンスバトルのイベントが開催されていて、その司会進行役をゆだねられた。

オープニングは地域の青年会による伝統芸能だったが、まだ客足はまばら。拍子抜けしないかと心配しながら、彼らのプロフィールや演目の紹介に力を込めた。日頃からかなりの練習を積んでいるに違いなく、青年会は伝統にのっとった勇壮な演武を披露し、会場に気がみなぎった。いよいよイベントがスタート。およそ60組が出演したダンスバトルでは、まず小学生ほどの子供たちが踊り、びっくりするようなテクニックだけでなく〝表現〟することへの情熱を発している。見た目がちょいと怖いお兄ちゃんやお姉ちゃんはダンスのために鍛え抜いた体でコマのようにくるくる回り、観客のおじちゃんやおばちゃんの目を釘付けにしている。中にはイベントの空気を読み、一切無駄のない動きで緊張と笑いを織り込む〝ダンス職人〟もいる。ウォウ～。踊りが苦手な私もいつのまにか指先や足の裏でリズムをとっている。

司会進行役といっても、ステージに上がるのはイベントの最初と最後だけ。スムーズにイベントを開始させ、華やかにフィナーレを飾るといったステージの流れを作る役割だ。だからダンスバトルの間は出番がなく、舞台の袖でステージを見やっていた。そこにブラザートムさんの姿を見つけたので、天気の話などを持ち出してご挨拶した。「初めまして、沖縄テレビの伊藤と申します。普段は経済や基地問題など堅い現場の取材が多くて、ダンスや音楽はからっきしわからないんですが、みんなとても生き生きと踊っているのを感じます。」すると、トムさんはダンスチームが1対1で対決するブレイキングバトルのステージを指さし、「ほら、今何が起こったかわかる？あっちのクルーが派手なブレイクをしたのに対して、反対側のクルーがしっかり受け止めて全員で返していったよね。ウォッホー、すごいカッコイイね！」

私が質問するまでもなく、トムさんは何時間にもわたってダンスの楽しさや出場者のレベルの高さを解説してくれた。テレビやイベントの仕事とは関係のない舞台裏で、ど素人一人にダンスの魅力を力説した。トムさんはこの日、全ての出場者のダンスをつぶさに見守った。

ダンスへの熱い思いが一つになるには、地元の協力が欠かせなかった。イベントスタッフの食事はありがちな仕出し弁当ではなく、地元のおかあさんたちによる炊き出しで、メニューは沖縄そばやジューシー（まぜご飯）、もずく、たんかんなど、沖縄の家庭料理を中心としたごちそうだった。

おかあさんたちはボランティアで協力していて、仮設食堂は彼女たちの放つオーラでアットホームな空気に包まれていた。

私が、おかあさんたちにしか出来ない仕事っぷりをイベントスタッフに力説すると、スタッフもおかあさんたちの存在感に共感した。地域の人たちが協力してすっかり沖縄らしいイベントに仕上がっていた。

キッズから国内トップレベルのダンサーたち、盛り上げ役を買って出たトムさんや地域のボランティアなど、みんなで創り上げたステージだったから、自然に涙と笑いが渦巻く、焼けるような一日となった。

沖縄にまた夏が巡ってきたこの日、私はジリジリと照りつける日差しに戸惑いながらも貝殻から抜けだし、そっと、何気なくみんなの輪の中に紛れ込むことができた。